

図3 乾乳後期にカルシウムを制限する場合の給与例

(4) 過肥の防止

ア 過肥の影響

過肥の牛は乾乳後期のDMIが低くなることが分かっています(図4)。DMIが下がることは虚弱子牛が生まれる一因です。また、過肥は難産の一因でもあります。母牛にとっても、生まれてくる子牛にとっても過肥には何一つ良いことはありません。分婧前の母牛の太りすぎ(図5)は、難産やDMI低下が大きくなり、初乳品質も低下する傾向にあります。

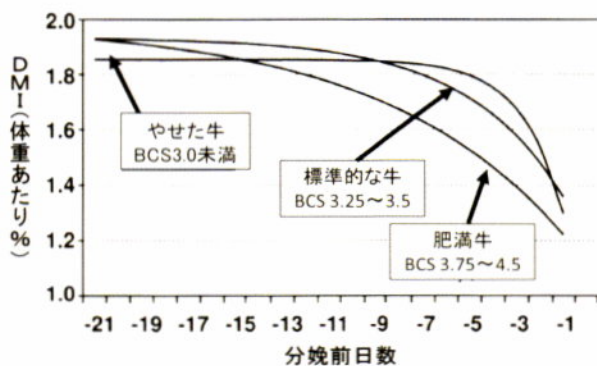


図4 種々のボディコンディションの牛の分婧前乾物摂取量

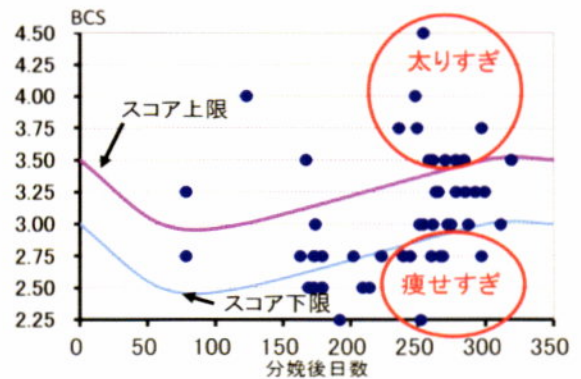


図5 牧場のBCSの分布例

イ ボディコンディションスコア (BCS) の意味

BCSとは、牛の腰角や座骨まわりの肉付きを判定してつけるスコアです。このスコアから乳牛のエネルギーバランスの状態を判定することができます。乾乳期に推奨されるBCSは3.0~3.25を目標に維持しておくことが望ましいと言われています(図6)。

しかし、乾乳中にエサを増減してBCSを調整すると、かえって栄養バランスを崩し、胎子に悪影響を及ぼすばかりでなく分婧トラブルを招きます。泌乳後期に盗食の防止や、パドックでの運動、濃厚飼料給与量の調整等を行きましょう。



図6 (左)肥りすぎ:BCS4. 0、(右)適正:BCS3. 25

### 3 望ましい乾乳牛の施設

乾乳牛舎を作った当初は非常に良かったのに、頭数が増えてくるにつれ事故が増えたという事例を良く目にします。これは過密により、食い負けする牛が出たり、敷料が汚れて衛生状態が悪くなったりして、ストレスに弱い乾乳牛が影響を受けた結果です。胎子の健全な発育のためにもパドックを併設して過密を解消したり、十分にえさを食べる環境を作る必要があります(図7)。

必要な床面積は1頭あたり15㎡以上です。特に、体の小さい末経産牛は、経産牛より弱いため、スペースを広めにとって注意しなければなりません。

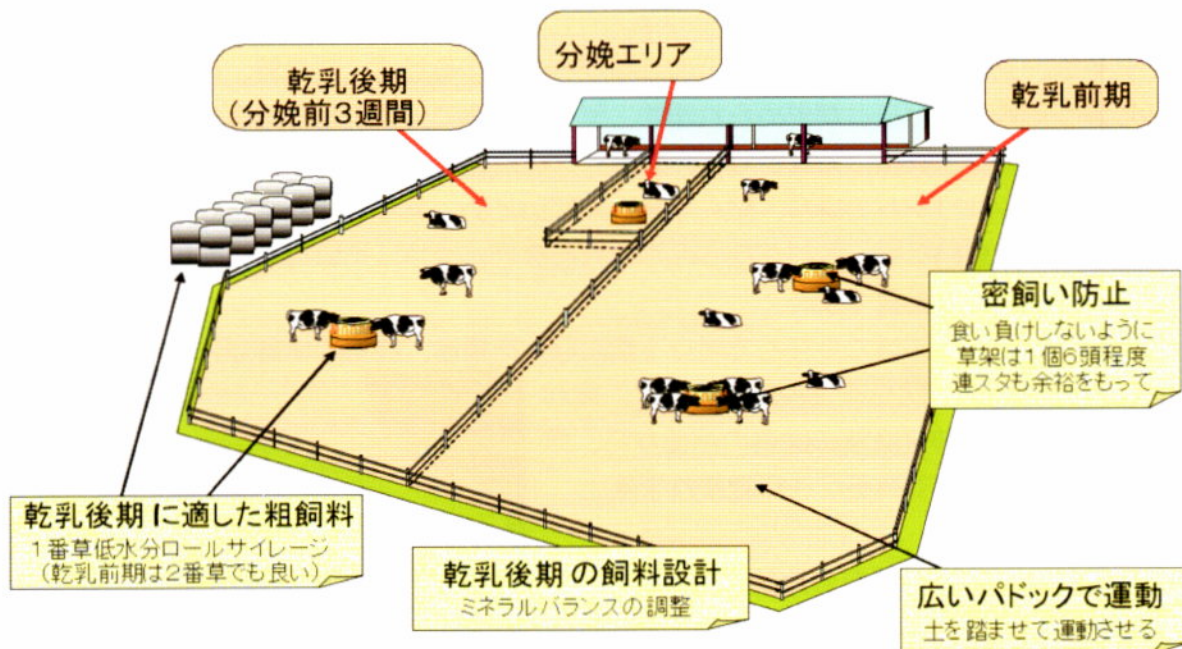


図7 乾乳牛舎レイアウト例